内田魯庵全集

補巻 *1*

随筆・評論 V

内田魯庵全集 補巻1

昭和六十二年五月二十五日 初版

著者 内田魯庵
編者 野村喬
発行者 荒井秀夫
印刷所 第二整版印刷所
製本所 文勇堂製本工業㈱
発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町
電話 (二九一)〇七九八
振替 東京四―六三一六〇

内田魯庵全集補巻1／隨筆・評論V・目次

戀愛の破産時代……九
ショーペンハワーの著作家論……二七
外人經營の中學教育の現狀……四〇
家庭の悲劇の教訓……五七
ツエツペリン伯逝く……六五
中等教育に餓ゑたる東京市……六九
混沌の露西亞……八三
社會上及び文化上から見たる赤星家入札……九五
成金論……一一三
隨煙隨語……一二六
展覽會是非……一三〇
亞細亞藝術の復興……一三八
隨煙錄……一四六
學術的汎亞細亞主義……一四九

露西亞は分裂乎滅亡乎……一六五
空文的學制案……一八〇
隨煙小言……一八九
經濟生活の革命……一九八
苞苴公行の日本……二一二
隨煙錄……二二五
來るべき社會的變革の一端……二三二
ミリタリズム鼓吹の危險……二四〇
パンを與へよ！……二五三
覺めよ中等階級……二六五
隨煙隨語……二七五
文展萬能病と投機的盲目鑑畫家……二七八
動搖の年を迎へて……二九一
徵兵廢止と屯田志願兵……三〇二
隨煙錄……三一〇
國民心理の根本的改造……三一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ドウシテ食ふ？……三二八
學術知識を重んぜざる日本人……三四二
熱汗錄……三五二
非町人……三五六
殘暑錄……三六九
知識階級の立場……三七二
隨煙語……三八二
階級打破……三八六
隨緣語……三九九
思想の危險よりは生活の危險……四〇二
電車怠業と東京市民……四一六
隨煙語……四三一
田舍者を笑ふ……四三三
喫煙錄……四四三
子の喪に籠つて……四四七
燒栗を咬みつゝ……四五四

時代錯誤的日本……四六三
喫煙語……四七四
學校騷擾は教師が非乎學生が非乎……四七六
喫煙錄……四八八
避暑地改造……四九一
社會的良心の總痲痺……五〇四
生活の最後の危機迫る……五一七
喫煙語……五三〇
何が危險である乎……五三四
喫煙語……五四七
置去りにされた政治……五五〇
喫煙語……五六一
服裝差別待遇の撤回……五六四
喫煙語……五七五
暴力主義の横行……五七八
喫煙語……五八六

奴隷的拜官心理と政治的無自覺……五九一
仰臥錄……五九九
新內閣是非……六〇三
暑中休暇廢止問題……六一六
生活問答……六二〇
物價問答……六三一
帝展問答……六四二
物騷乎ノンキ乎……六五五
運動競技の犧牲……六六四
談餘……六七五
解題……六七九
解說……六八五

隨筆・評論V

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

案頭三尺

（一）

戀愛の破産時代

男女間の色情的葛藤は古今來絶間なく反覆されて、殆んど人間の止む能はざる家常茶飯であるかのやうな感があつたが、之までは上中流階級は素より無智なる匹夫匹婦間でも之を恥ぢてゐたが、近時因襲破壞の叫びが高くなると共に、此の色情的葛藤をも宛も或る嚴肅なる主義主張を實行する爲めの革命的犧牲なるが如く堂々として憚らず高唱するものがある。渠等の云ふ處は戀愛の徹底であるが、我等は戀愛觀としてよりは寧ろ性慾問題として扱ふを適當なりと信ずる。

一　科學に禍ひされたる戀愛觀

科學の進歩が總ての精神問題を荒寥した中に、就中最も科學に禍ひされたは宗教と戀愛とである。佛教も基督教も今日では最早殆んど宗教的生命を失つて、僅に冠婚葬祭の儀式として殘喘を保つてをる。其教理の如きも思想上の活きた問題としては寧ろ或る一種の哲學的思辯若くは宗教上の題目として扱はれてをる。

宗教は姑らく措くが、戀愛も亦生物學の進歩に禍ひされ、殊に近時に在つては性慾研究及び優生學(ユーゼニックス)の二方面から壓迫されて殆んど眞の道德的意義及び詩的情趣を失はんとしてゐる。昔しは戀愛と云へば百數の大宮人は素より天さかる鄙の賤男賤女の間でも美くしい優しい床しい眷しいものであつたが、今では科學が赤裸々に本體を暴露して饑渴と等しい本能慾として了つた。丁度野伏が美くしい上臈の綾羅を引剝いて素裸として了つたやうなものだ。

科學者は戀愛を性慾の發動と解し、戀愛の目的は性慾の滿足であると說いてをる。若し眞實此の如く信じてをるなら世に科學者の妻ほど憐むべき悲慘なものは無い。渠女は習慣的に妻として戶籍簿に登錄されてるが、實は性慾滿足の機械となつてる一夜妻に過ぎないのである。が、事實は科學者も亦科學で說明出來ない愛情を妻に與へてゐるので、戀愛が決して性慾一遍で無いのを事實上に語つてをる。

優生學の研究は直接に戀愛と交涉してゐないが戀愛の範圍を制限せんとしてゐる。其所說は生殖上大に

考慮しなければならぬは勿論であるが、優生學者は戀愛と生殖とを同一視してをる如き感がある。否、渠等は生殖一天張にて全く戀愛を無視し、種族の優良を計る爲めには殆んど人間を牛馬の如くに扱つても可なるやうに思つてをる。が、然らば優生學者（ユーゼニスト）は自分の妻に對して種馬の如き心持をのみ持つてるかと云ふと決して然らず、優生學者も亦必ず生殖以外の愛情を自分の妻に與へてゐるであらう。

科學の所說は決して僞りでは無い。一々的確なる實驗上の根據を有してをる。が、精神的方面の總ては科學だけでは到底說明し盡されないので、戀愛にも亦科學の侵入を許さない神祕の領域がある。科學者と雖ども性慾や生殖だけでは戀愛の全部を解釋し得ないのを自分の生活の事實の上に語つてをる。が、科學の所說は22が4で數字的的確に等しい論理的方程式から成立つてゐるゆゑ、文明に趨けば趨くほど、知識に進めば進むほど益々科學に隨喜盲從して故意に精神的方面に眼を閉づる傾きがある。例へば自由戀愛とか貞操問題とか云ふは直接に科學と交涉しない論理問題であるが、是等の問題を尋究するに方つて道德的考慮が性慾とか生殖とか云ふ科學的知識に由て如何に煩擾され如何に溷濁されるかは計り知れない。

二　動物性を論基とする今の道德說

進化論前、人間は神の特別の恩寵を蒙るものとして動物以外別格に扱はれてゐた。隨つて神の掟の名の下に布かれ、道德律に服するを人間の本分としてゐた。是等の道德律は東西各々異なるが、苟くも文化を有する民族の間に行はれたものは皆同じ宗教的權威を持つてゐた。然るに進化論後、人間と動物との分界

が撤去されると、人間を動物以外別格に扱つてゐた時代の產物たる道德律は、人間も亦動物の一つであると科學的に證明された以上は許す可からざる非科學的であるといふ疑惑を生じ、動物に適用める事の出來ない道德律は同じ動物性を有する人間にも亦決して適當で無いゆゑ、今少しく科學的に人間の動物性をも算當して更革されねばならぬ必要があるやうに動搖して來た。

此動搖は頗る理據がある。總てが進化論の影響を受けて政治も宗教も社會組織も漸次に舊容を更めた以上は獨り道德が依然として舊態を持續し得る筈は無いのである。事實、今日の道德の形式は次第に變易して、因襲的に猶ほ行はるゝものと雖も之を守るの厚薄、之を責むるの寬嚴の程度を異にしてをるが、其動搖を感じて之を攻究するや、恰も醫者が蛙や兎を解剖して人間の病理を究めるやうに較やもすれば動物の習癖や性行を規矩として人間の道德を論ずる傾きがある。少しく過大に云へば、昔しは鳩に三枝の禮あり鴉に反哺の孝あり人豈之に劣る可けんやと云つたのが、今は猫も亂媾し犬も搏噬す人亦之に倣はざる可けんやと云ふに等しい極度の暴論さへ怪まれなくなつた。醫學は人間の身體だけを扱ふものゆゑ蛙や兎の解剖も極めて重大な研究資料となるであらうが、道德說は本來人間の道德を攻究するものであるを、今日でも較やもすれば道德性を全く度外視して、單に動物性を論基として道德を論じてをる。

三　人は皆心に姦淫す

爰では道德を論ずるので無いから一般道德說の批評は姑らく措くが、戀愛のやうな靈肉兩端に跨がるデ

リケートな問題となると、動物性を論基とする今日の道德說は著るしく危險となる。自由戀愛或は貞操問題の如きも要は性交を如何に扱ふかに由て議論が分れるのである。

聖書には心の中に女を懷ふをだも姦淫の一つに數へてをる。聖書は人間を罪の子と認めてをるから、此の嚴刻な宣告を下した所以は人間は誰一人として心の中に姦淫せざるものも無いのを豫斷したのであらう。姦淫には限らないが、人間は誰でも赤裸々に打明ける事の出來ない恥かしい祕密を常に心の奥に多く蓄へてゐるもので、所謂懺悔錄に懺悔し得るは其の恥かしさの觀念が久しい歲月を經て稀薄となつてから後の事であつて、聖人と雖ども亦恐らく此の恥かしい汚ない念の心に燃えるを全く絕つ事は出來ないであらう。況してや本能慾の盛んな靑年期及び壯年期に在つては——或は中老以上に於ても亦——絕間なく姦淫の念に脅迫されるのが動物性を存する人間としては當然であつて、人誰か心に姦淫を懷はざるものは無いであらう。が、其の心の中に潛める姦淫を包み蔽し抑へ留めて表面に現さないのが人間の道德性である。

昔し志賀寺の朝寬上人は京極の御息所を戀して艱み病つてゐたが、或る時御息所と邂逅つて小聖の御簾を隔てゝ其手を握つて無明の眠を覺ましたといふ。朝寬上人に就ては種種の傳說があるが、假に此儘の美くしい戀物語として置いて此の御息所の手を握つた時の朝寬上人の心持は果して傳說が語る通りに大空の澄渡るやうに淸くサツパリしたものと解釋すべきものであらう乎。クラフトエビング流に洞見したなら如何なる性的狀態が上人の機能の一部に現れてゐたかを計られないのである。が、神ならば或は上人を罪する事が出來やうが、人間同士は强て生理的洞察を逞しうして人間共通の醜い祕密を暴露する必要は無いの

である。

性慾衝動は自然の生理的事實で、靈界の聖者と雖ども如何ともし難いのであるから、未婚の青年が異性を懷ふは魯か既婚の男女も亦時として配偶者以外の異性に性的興奮を誘起される場合があるであらう。が、此場合之を制抑するが人間としての道德的義務である。

四　所謂自由戀愛乎自由性交乎

自由戀愛といふは本來男女間の因襲道德に反抗する叫びであつて、道德的に容認されべき多少の理由がある。

今日の男女間の因襲道德は男女何れをも幸ひならしむる道では無い。結婚の多くが戀愛に由て成立してゐない日本は本より世界の何れへ行くも然らざるなき通有の事實であつて結婚生活の大部分は新婚の甘醉覺むるや否や直に惡夢に魘はれてゐる。尤も此の如き不滿足なる結婚生活は單に因襲道德が禍ひした爲めばかりでなくて其間に種々の複雜な社會的事情が纏綿してゐるが、世路の表裏明暗を知る由なき青春男女が戀愛の蜜を求めて屢々結婚の苦味を與へらるゝや、勢ひ因襲道德を呪うて自由戀愛に趨るは多少恕すべき點がないでもない。

渠等が眼前の幾多の苦き實例を見て未だ結婚せざるに先立ちて自由戀愛に趨るはまだしもである。渠等の聰明にして正當なる戀愛の行く路を誤まらざる限りは此種の自由戀愛は或は今の盲目的なる結婚よりも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c